

商・高橋義仁ゼミ

ドラッグストアに新規事業を提案

経営戦略について学ぶ高橋義仁ゼミの3年次生4人が、ドラッグストア最大手のウエルシア薬局の協力を得て同社のビジネスプランづくりに挑戦した。12月22日にオンラインで最終報告会を開き、担当者に向けて二つのビジネスプランを発表した。

岸田彩里さんと藤沢実穂さんは「健康美を追求した新たな販売チャネルを提案。顧客の利便性向上や薬剤師人材の有効活用につながる」と発表ができた。オンラインで薬指導など、だれもが利用できるために、セントラルキッチンで調理した食材を各店

ゼミ長の岸田さんは「未知ことは楽しい。元々社会の業界について調べ、知るプロセスが楽しかった。今回の学びを通じて、視野も広がった」と笑顔で話した。

高橋教授は最終報告会を振り返り「各自努力を重ね、良い提案を出してくれた。苦勞しながら一つの物事をやり遂げた自信を、今後のゼミ活動や卒業執筆に生かしてほしい」と総括した。

弁当チームが作成した商品イメージのイラスト

学びの成果

学内外で発信

各学部のゼミナール（ネットワーク情報学部はプロジェクト）では、少人数教育で専門の知識や技術を得られ、学習成果を学内外で発表している。コロナ禍でもオンラインを活用し、指導の教員や仲間たちと密接なコミュニケーションを取りながら、成果を残した各ゼミの活動を紹介します。

前列左から吉田さん、樋口さん、水野さん。
後列左から保住さん、坂本さん



経営・目黒ゼミ

食品ロス防止プラン考案

学生ビジネスコンテストで努力賞

経営学部・目黒良母ゼミ、保住紗英さん、吉田生が（一財）学生サポートセンター主催の「学生ビジネスコンテスト」で努力賞を受賞した。同コンテストは、独創性や市場性、社会性などの観点から審査を行い、優れたプランを選出する。18回目を数える今回は、全国から160件以上の応募があった。食品ロス防止を目指すことも

に、収益の一部を子ども食堂に寄付し貧困問題対策にも役立てる。

参加したメンバーにとって、ビジネスプランの作成は初めての挑戦となった。目黒教授やコンテストから経験を持つゼミの先輩からのアドバイスを参考に、理想と実現可能性のバランスを考えながらプランを作り上げた。

オンラインで最終成果披露

グループで研究や開発に取り組むネットワーク情報学部3年次の必修科目「プロジェクト」の最終発表会が12月19日、オンラインで行われ、27チームが活動の成果を発表した。

佐竹プロジェクトが作成したバーカ



経済・博ゼミ

2大学と合同ゼミ

国際経済の見識深める



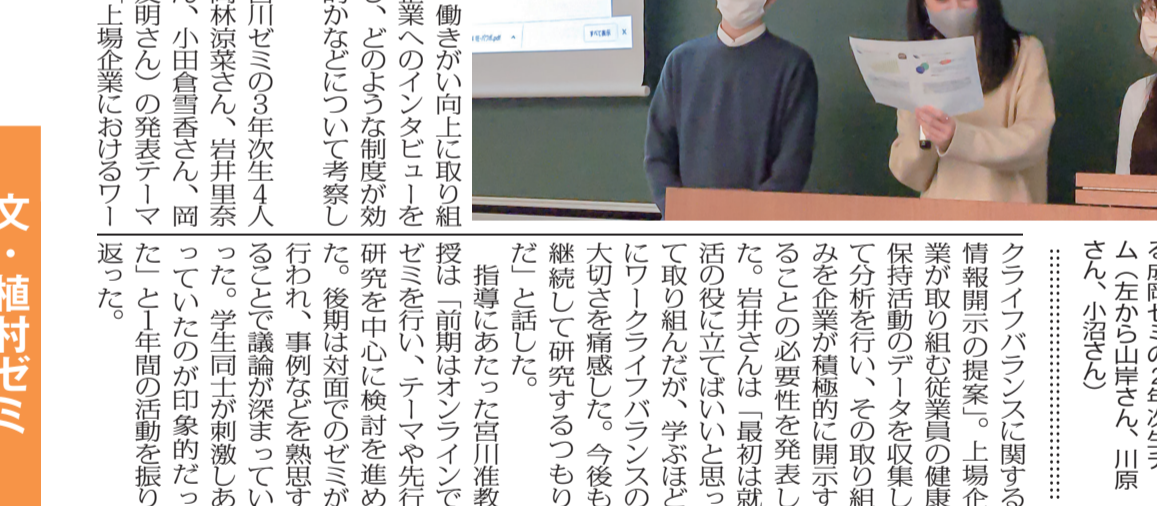
現代アフリカ経済をテーマとする経済学部・博凱儀ゼミが12月19日、他大学のゼミとの合同オンラインセミナーを開催した。このセミナーは、博凱儀ゼミのオンラインセミナーと博凱儀教授が「今年度はコロナ禍でオンラインが中心だったのが、学生の人間力を育てたい、制限のある中でも学生同士が協働して共に学べる場を作ることができた。学生たちの意欲と実行力に教えることができた」と話した。

企業や準備はゼミ生が中心となり、鈴木理奈さん（3年次）は「特にオンライン参加者にも対面と同じような雰囲気を感じてもらえるように意識した。『国際的に活躍する人材像』をテーマに講演。日本と海外の文化や考え方の違いを明快に語った。参加学生は熱心に聴き、終了後は活発な質疑が行われた。

商・成岡ゼミ × 経営・宮川ゼミ

合同発表会を開催

経営学部・成岡浩二ゼミと、経営学部・宮川宏二ゼミが、合同発表会を12月19日、神山キャンパスで開催した。成岡ゼミは3年次生3人、宮川ゼミは3年次生4人（岡林涼菜さん、岩井里奈さん、小田由佳さん、岡野友明さん）の発表テーマが「上場企業におけるワークスプレッドの活用」と「山岸さん、川原かなさん、小沼由佳さん」は働きがいと企業の業績向上の関係性をテーマに発表を行った。



文・川上ゼミ

『SHOW』15号刊行

文学部・川上隆志ゼミが『SHOW』15号を発行した。『SHOW』は、元編集者である川上教授の指導のもと、企画から制作まですべての工程をゼミ生が手がけ、毎年発行している。コロナ禍の今年度は、対面取材もよりゼミ生同士の集まりが難しくなったが、オンラインを活用して意識疎遠を埋めながら刊行にこぎ着けた。

勝倉さんは「苦勞が多かったが、柔軟な対応力が身についた。雑誌制作をきっかけに未曾有の事態を見つけた。例年はない難しさもあったが、オンラインツールを活用して意識疎遠を埋めながら刊行にこぎ着けた。希望者はkazumi@stcc.ac.jpまで。」

「『SHOW』は、元編集者である川上教授の指導のもと、企画から制作まですべての工程をゼミ生が手がけ、毎年発行している。コロナ禍の今年度は、対面取材もよりゼミ生同士の集まりが難しくなったが、オンラインを活用して意識疎遠を埋めながら刊行にこぎ着けた。」

通常授業とオンライン授業を比較した結果、出席率が良かったのは33%、小田さんは「回答からさまざまな学生像が見えてきた」と話す。



第21回育友会奨励賞

6個人 1団体が受賞

学業やスポーツ、社会貢献など、さまざまな取り組みを積極的に行った学生を表彰する第21回育友会奨励賞の表彰式が12月12日、神山キャンパスで行われた。個人6人と1団体が新澤千佳子育友会長から賞状と奨励賞が授与された。

感動拡大防止のため、式の様子は育友会役員にウェブで配信。一部の受賞者も新澤育友会長（右から2人目、佐々木重幸学友会長（左端）と受賞者）

オンラインに参加した。団体の一部で受賞した体育生は「部活動が、昨年の全日本学生選手権力強く頑張った200位で優勝。オンラインで出席した代表の大久保啓介さんは「何れも勝つまで挑戦し続けて優勝を支えてくれた私たちのおかげ、奨励賞は新しい船の調達や修理に充てたい」と喜びを語った。

笹森貴哉さん（文3）は「小説で自己研鑽を重ねていて、『書くことで、小説の読み方も深くなった。これからますますチャレンジしていきたい」と述べた。

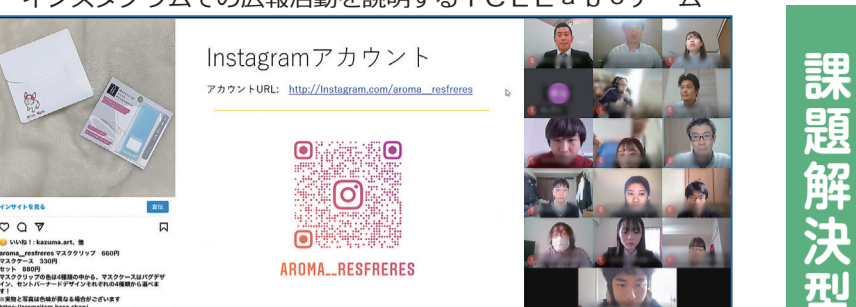
育友会奨励賞は学生生活を支えようとする育友会が設けており、学生が自らの創造的な取り組みや成果を3000文字以上にまとめて応募する。今年度は14件の応募があった。

入賞者チームは次の通り。（敬称略）

「個人」梅村直希（経済）「素人から2年でプロ格闘家になるまでの軌跡」。東南アジアでの生活を通じて、

「断る理由がない無償の価値」日本の山内貴雅（商4）「日本のおもてなし文化」

「悲願の日本一。全日本学生力又スプリント選手権24年ぶりの金メダル獲得」と

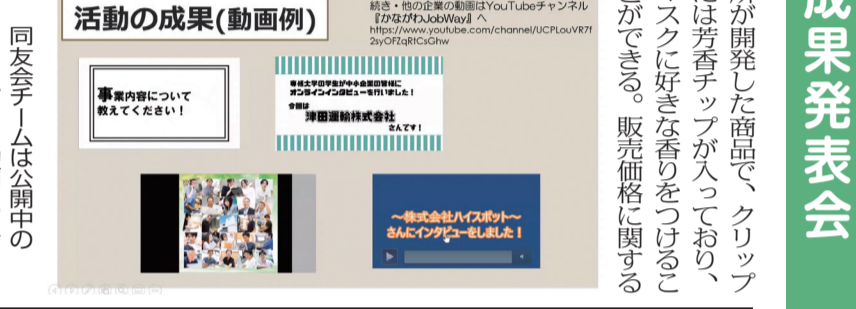


課題解決型インタビュゼミ

8プロジェクトが活動報告

キャリアデザインセンターが主催する課題解決型インタビュゼミの成果発表会が12月19日、オンラインで行われた。

同インタビュゼミは行政や企業などから提案された課題に、学部・学年の垣根を超えたチームで挑む本学独自の取り組み。15回目となる今年度は、8プロジェクトに約60人が参加した。コロナ禍により、9月から約4カ月間、オンラインでの活動となったが、学生たちは仲間と協力しながら、イベントの企画・運営、新規事業の提案、商品開発などに携わった。



所が開発した商品で、クリップには芳香チップが入っており、マスクに好きな香りをつけることができる。販売価格に関するところ。

同友会チームは公開中のInstagram動画を紹介します。

文・植村ゼミ

学生・教員にアンケート実施

「オンライン授業の意識と課題」



文学部・植村八潮ゼミの3年次生3人が、ゼミ活動でオンライン授業についてアンケートを実施し、まとめた。

出版メディアを研究する植村ゼミでは、毎年3年次生がゼミ論に取り組み、今年度の共同テーマは「新型コロナウイルス感染症の影響」。

山崎航さん、小田由佳さん、長谷川さくらさんのアンケートには、「オンライン授業における学生・教員双方の意識と課題」に取り組んだ。長谷川さんは「みんながオンライン授業についてどう感じているのかわからない」と思ったと語る。

調査方法として学生と教員にアンケートを行うこととした。全学部対象の大規模な調査と同時に行われたが、学生からの質問では「率直な意見が欲しい」という声が多く、アンケートを送付した20日間で学生683人、教員50人から回答があった。

学生では「オンライン授業が好き」という結果が6割という結果に。また、顔出し声出しの授業スタイルは教員には好評だったが、学生はあまり望んでいないことも明らかになった。

植村教授とともに結果を論文にまとめ、情報科学研究所オンラインゼミナールで報告し、所報に掲載した。山崎さんは「課題を設定し、疑問を解決しているという学び、調査の面白さを感じた。今後のゼミ活動や研究に生かしたい」と手応えを感じている。